

本多健一著

『中近世京都の祭礼と空間構造』

——御霊祭・今宮祭・六斎念仏——

渡辺 康代

本書は、中近世の京都における祭礼文化の多彩さと全体像を明らかにするため、そして「(祭礼が当時の)地域社会といかなる関係にあったかの考察」(二頁)をするために、従来は祇園祭に偏重していた京都の祭礼研究において、上京の御霊祭と西陣の今宮祭、六斎念仏の実態解明を進められた労作である。

本書は、本多健一氏が二〇一一年度に立命館大学へ提出された博士論文に加筆・修正を施すとともに、その他発表した諸論文、新稿も加えて上梓されたものである。「あとがき」から、著者の本多健一氏は会社での勤務経験をへて、京都の祭礼をもとにした歴史地理学研究に約一〇年間邁進されてきたことがわかる。著者は、立脚する歴史地理学はもとより、層の厚い中世・近世の京都の祭礼に関する日本史・芸能史をはじめとする先行研究および祭礼史料を渉猟・博搜されながら新知見を開拓されていた。評者は、著者と同じく歴史地理学に立脚し、中近世という長いスパンのなかでの地方城下町の祭礼内容とその担い手の変化を明らかにし、それによって各城下町の構成員の変化やその地域的差異を明らかにする研究を進めている。中近世における城下町をはじめ

とする都市祭礼の実態を明らかにする際に、中世日本随一の都であつた京都における祭礼の研究を避けて通ることは出来ない。にもかかわらず、先行研究の層の厚さにひるんだため、評者はこれまで踏み込んでこなかった。それだけに、著者が御霊祭や今宮祭、六斎念仏に光を当て、新出の史料を見出し、層の厚い先行研究に自らの新知見を加えられたことに、評者は尊敬の念を禁じ得ない。本書の構成は以下のとおりである。

序章 祭礼と地域社会試論

第一章 中世祭礼における絆とその変容

第二章 中世の御霊祭——応仁の乱後の復興まで——

第三章 一六世紀の御霊社・御霊祭と都市空間

第四章 中世前期の今宮祭——祭礼行列の渡物と疫病対策——

第五章 中世後期の今宮祭と西陣氏子区域

第六章 近世後期の今宮祭と空間構造

第七章 近世六斎念仏再考

第八章 六斎念仏からみた近世の都市と周辺地域

終章 概括および課題・展望

副題にもあるように、中世の御霊祭を論じられた第二章・第三章、中世・近世の今宮祭を論じられた第四章・第五章・第六章、近世の六斎念仏を論じられた第七章・第八章が、本書を構成する柱となっている。また、祇園祭や御霊祭や今宮祭など、京都の代表的な祭礼に共通して現れる「絆」の形成とその変容についての論考を、第一章として加えられ、これらに序章・終章が付されて

いる。本書では、「祭礼」とは「非日常的なハレの日に執り行われる、定期的・民俗的・集団的な年中行事の総称」(二四頁)、「神社の神祭り(神社祭礼)だけでなく、仏教行事の法会や縁日、あるいはそれらに付随する民俗芸能なども含めた広い概念」(二四頁)とされているため、京都市中の御霊祭と今宮祭という神社祭礼はもとより、六斎念仏といった郊外の民俗芸能も視野に含められているところに特徴がある。評者の力量の乏しさのため、神社祭礼に偏重した書評となってしまうことをご了承いただき、以下、各章の内容紹介をおこなった後、評者からみた課題を整理することにした。

序章において、本書のタイトルにもある「祭礼の空間構造」とは「祭礼において、それに何らかの参画をする人々やその組織およびそれらの営みが、関連する地域で空間的拡がりをもって関係づけられているあり方」(六頁)と定義されている。「関連する地域」とは、「祭礼を担う地域」「祭礼が執り行われる地域」「見物客が居住する地域」といった意味を全て含む広い概念」(六頁)であり、「祭礼を担う地域」に焦点を当て、そこからその他の「関連する地域」との関係などを探っていく手段を踏む」(六頁)こと、また、「何らかの参画をする人々」には「見物客なども含まれる」(六頁)とする。

著者は、祭礼を研究する際には三つの方向性が存在すると指摘する。「①祭礼のあり方から、祭礼を担う地域・小地域内部の社会構造などとの関係を考察する方向。地域・小地域内部の社会構造とは、例えば人口構成、社会階層、生業・経済力などを意味する」「②祭礼時において、祭礼を担う地域内が空間的に分節され、

それぞれの小地域間でいかなる関係が生じているかを考察する方向。例えば小地域間で序列、協力、対抗といった関係が現れる現象や、それらの地理的關係などを考察する」「③祭礼時において、祭礼を担う地域とそれ以外の周辺地域との関係を考察する方向。例えば経済取引などを背景とする協力、見物客来訪の影響などを考察する」(一八頁)立場である。祭礼がおこなわれている、また、かつておこなわれた地域における重層的な「空間構造」を捉えるための、著者の視座の表明がなされている。祭礼組織のみならず見物人といった、祭礼へ何らかの関与をする全ての人々を指標として、祭礼の場に立ち現れる地区や地域間の結びつき方を「空間構造」とし、その解明を目指されたものと、評者は理解した。

第一章では、中世京都の諸祭礼に共通して現れる「鉾」という祭具に着目している。審美的な注目を集めた特殊な鉾は、祇園・稲荷・北野・御霊祭において一四世紀から出現し、一五世紀半ばの最盛期には祭礼行列の中心となったと述べる。この鉾を調進したのは一般の都市住民であり、これが祇園会では「山鉾」、御霊祭では剣鉾に変化したとする。例えば、著者は、稲荷祭における鉾について、嘉吉元年(一四四一)の『看聞御記』に「今日稲荷祭也、桙不渡、町人共二神崇厳密之間俄経営結構云々」とあることから、「当時の『町人共』が中心になって、祭に鉾などを調進していたと解釈」(三八頁)する。さらに、御霊祭の鉾は明応七年(一四九八)に復興し、永正八年(一五一二)の『実隆公記』における「上京町民」などの表記から、一六世紀の御霊祭での「鉾を調進した主体は、いずれも一般の都市住民と考え」(四三

頁、(四七頁) ている。

第二章では、上京を代表する祭礼である御霊祭が取り上げられ、平安期から一五世紀までの祭礼の成立と変遷について述べている。祭礼の担い手は一般住民であったとする一方、一四世紀末から足利將軍による御霊祭見物がしばしばおこなわれ、審美的な注目を集めた鉾が出されたこと、御霊社が御所の氏神ともなったことを述べる。

第三章では、下御霊社と上下御旅所の位置の変遷を明らかにし、一六世紀を中心に、社および御旅所の場所と当該期の都市空間との関係が論じられている。応仁の乱によって中断された御霊祭は明応七年(一四九八)に復興しているが、上下御霊祭における復興の程度が比較検討されている。上御霊祭が戦国期、特に一六世紀前半の京都上京を代表する祭礼となった一方、「中京」地域を氏子区域としていた下御霊社は衰退したと述べる。その理由の一つとして、豊臣秀吉の京都改造による市街地開発が「中京」においておこなわれたことが考察され、一六世紀の御霊祭は、当該期の都市空間の変化を如実に反映したものと意義づけられている。

西陣の祭礼である今宮祭が取り上げられた第四章から第六章は、本書のなかでもとりわけ重厚に論じられている。

第四章では、著者がおこなわれた『今宮神社文書』などの調査によって、鎌倉期までは「疫病が流行する年に限ってそのつど祭礼が行われる」(一一四頁)ものであったことなどの、中世前期における今宮祭の「官祭的・臨時祭的・疫病対策的な性格」(一一四頁)が明らかにされた。一方、一四世紀半ばの貞治四年(一三六五)、將軍足利義詮の母の死去に伴う「三〇日間の天下蝕穢

が宣せられたが、(五月)九日の今宮祭は延引されることなく執行された」(一一五頁)。著者は、当時の今宮祭は、従来の官祭的性格が著しく薄れ、もはや公的関与の及ばぬ祭礼になっていた、と述べる。そして、貞治六年(一三六七)には今宮祭における五月七日の神輿迎が初見される(一一五頁)。「市街地での御旅所祭祀を執り行う主たる担い手は、先行する南部祭礼の事例から類推すれば、平安京北部・北郊(後の上京ないし西陣)に居住する一般の都市住民であったと考えられ、今宮祭はこの時期を境に彼らが支える祭礼へと変容し、現在に至ったのである」(一一五、一一六頁)とする。

第五章では、一六世紀の今宮祭における氏子区域や神輿巡幸路を復原し、氏子区域の内部に序列が存在したことを指摘し、祭礼の空間構造は、過去において現実に存在した地域の社会構造や出来事などが積み重ねられて形成されたとする。具体的には、今宮祭の鉾には、古鉾としての千本鉾と新鉾としての京鉾とがあり、前者は後者に対して格式という点で優位を占める。しかしながら、戦国期の西陣のなかでも大舎人座や酒屋が存在し、機業をはじめとする先進商業街区であった大宮・小川地区が京鉾で、大宮・小川地区に比肩したとは言い難い千本地区が千本鉾を供奉するという「ねじれ」現象がみられる。中近世を通して、大宮・小川地区と千本地区との経済力の格差は歴然であった。著者はこの「ねじれ」が生じた理由の究明に進み、元龜四年(一五七三)の織田信長による上京焼討のため、風下に位置した大宮・小川地区は千本地区よりもはるかに大きな被害を受け、焼討からの復興に手間取っている間に千本鉾の台頭を許したのではないか(一二二頁)、

とする。

第六章では、神聖な祭具を守護する鉾町を中心にして、祭礼の維持・運営を中心的に担う西陣古町地域、さらにその他地域というように構成されている今宮祭の空間構造は、単純な同心円的な分布を描かず、実態は複雑であることを指摘している。それは「特に戦国期から安土桃山期にかけての今宮祭および氏子区域の歴史に起因するものであろう」（一九六頁）とする。氏子区域に置れる「今宮祭の空間構造と、当時の京都（主に西陣）」における日常的な社会構造などとの関係を明らかにする必要がある」（二〇一頁）とする。

第七章では、近世の京都市中で行われた六斎念仏について検討し、公儀からの執行規制を手がかりに、一八世紀末より芸能化していった六斎念仏の実態について明らかにしている。

第八章では、京都近郊の村落に講中が組織された近世の民俗芸能、六斎念仏を対象として、祭礼を担う地域（近郊の村落）とそれが執り行われる地域（京都市中）との文化的結合関係について論じ、江戸中後期以降に、六斎念仏の講中が京都市中との関係を強める現象を明らかにしている。同時期には、近郊農民が市中の神社祭礼に駕輿丁などとして参加する傾向がみられ、これも近郊農民と京都市中との関係性の深化の指標となると指摘する。

終章では「今後は祇園会（祇園祭）を中心とする先行研究の成果も踏まえつつ、時代によってそれぞれの祭礼に共通する点、相違する点に着目しながら比較考察していくことで、京都における都市祭礼文化（史）の全体像が新たに浮かび上」（二七六頁）がするようにしていきたいとの展望が示されている。

以下、本書においてさらに議論を深める余地があると思われる三つの課題点について整理したい。

一つ目の検討点は、事例以外の祭礼を視野に入れた鉾の位置づけである。第一章では、「中世京都の主要な祭礼の行列に共通して現れる鉾」（三二頁）に着目されている。たしかに「剣鉾」は、例えば中近世の奈良の春日若宮祭礼を特徴づける祭具と呼ばれている。一方、一六世紀より、京都の吉田神道を先駆的に採り入れていた伊賀国の一宮祭礼では、「御鉾ヲ送」ることがおこなわれていた。大和・近江・伊賀など京都近国の祭礼に目を配ることで、「剣鉾」が中近世の京都を特徴づける祭具であったことがより鮮明となると思われる。

京都の賀茂祭（葵祭）では平安期以来、警固役である検非違使の放免（鉾持）が肩に担いで参列した鉾（犀鉾）が出ていた。

三枝暁子氏による北野祭についての論考には、「平安期に『公的』・『国家的』祭礼として始められた北野祭は、南北朝末期に足利将軍・公方が『御見物』をして指揮をとる祭礼へと変化した、その経済基盤も大蔵省・率分所といった朝廷財政から幕府の寄進した料所へと変化した。また大宿禰神人・西京神人がそれぞれ用意する鉾も登場しはじめ、これら神人はまた馬上役をも負担するところとなった」とある。

著者は「賀茂祭の『犀鉾』と、保元二年（一一五七）、後白河院より下賜された『鉾』や祇園会の神社側が調進する『馬上十二鉾』を除くと、鉾はいずれも一四世紀から一五世紀にかけて現れ、一五世紀なかばに最も盛んに出され」、「これらを調進した主体は「いずれも一般の都市住民と考え」（四三頁）ているが、除外

したこれらや三枝氏の論考などに注目して、「神人」がいつごろまで鉾の担い手として役割を持ち、「一般の都市住民」がそれに取って代わるのがいつごろであったのかを明らかにすることは不可欠であろう。

このように、二つ目の課題としては、祭礼の担い手をひとくくりに「都市住民」とせず、丁寧にみる必要性があるように思われる。

例えば第四章において、著者は、今宮祭の担い手が「一般の都市住民」であったとする一方で、今宮祭が、応仁の乱後「遅くとも長享三年（延徳元、一四八九）」という、祇園会や御霊祭よりも早期に「復興」を遂げたのは、「今宮社が將軍義尚の氏神」であり、「乱直後から、室町幕府が今宮社への後援姿勢を示していた」（一四八頁）ためであるとも指摘する。

本書においては、「氏子区域」とは、「ある神社を氏神（産土神）と仰いで信仰する人々（氏子）が集住する地域」（一四六頁）とされ、「一般住民が支える都市的な祭礼としての今宮祭を考えるにあたっては、まず彼らが集住する地域、すなわち今宮社の氏子区域がいかに形成され、変遷してきたかが問われなければならない」（一四六頁）とされているが、「氏子」とは一般住民に限らないはずである。本書においても明らかにされたように、足利將軍義尚も氏人であったし、神人もまたしかりである。本書においては「氏子」や祭礼の担い手である「一般の都市住民」が、具体的にいかなる人々を示すものであるのか、定義づける必要があったであろう。今宮祭の「氏子区域」の説明をもって祭礼の「空間構造」を示されるのみならず、区域に住む「氏子」の実態とその

変化を具体的に明らかにすることで、今後それが示されることを評者は期待したい。

同じく第四章において、著者は、貞治六年（一三六七）に今宮祭の五月七日の神輿迎が初見されたことから、「市街地での御旅所祭祀を執り行う主たる担い手は、先行する南部祭礼の事例から類推すれば、平安京北部・北郊（後の上京ないし西陣）に居住する一般の都市住民であったと考えられ、今宮祭はこの時期を境に一般の都市住民が支える祭礼へと変容し、現在に至ったのであろう」（二一五―二一六頁）とされ、終章において「上下御霊社や今宮社のそれ（氏子区域および住民の氏子意識）が確実に認められるのは一四世紀末―一五世紀初頭」（二七二頁）であるとされている。一方、著者は、明応六年（一四九七）五月の『親長卿記』により、駕輿丁が神輿をうち捨てて退散してしまったので、「町人」らがその分ではないけれども、神輿を昇いて御旅所に入れた（一五三頁）、との重要な指摘をおこなっている。ここから、一五世紀末期における今宮祭の担い手には、少なくとも駕輿丁の神人と「町人」の二者があったことが判り、今宮祭の担い手の変化は、「朝廷や院の『諸司諸衛』から一般の都市住民へ」（一一六頁）といった単純なものではなかったことが判る。「風流踊に関する史料は、町ないし町組の形成を考える上でも、有効な素材となりうる」（二三頁）という守屋毅氏や河内将芳氏の指摘に学び、神輿迎はもとより、風流踊などを事例に、上京や西陣における都市的祭礼の実施とその開始時期を明らかにされることは、意義のあることではないだろうか。

三つ目の課題としては、祭礼の担い手をどう理解するかが、空

間構造の解釈に強く影響していることに注意しておきたい。

第五章における千本地区による千本鉦の供奉と、大宮・小川地区による京鉦の供奉という「ねじれ」現象について、評者は、千本鉦は経済力を表現するものではなく、「町」の成立の相対的な古さを表現しているのではないかと予想した。豊田武氏^④は、繁栄を遂げた大舍人座が元亀二年（一五七二）頃より史料に現れなくなり、その背景として秀吉の楽座政策による座の解体を想定されている。その後、大舍人座三人は、その後裔を核として、延宝九年（一六八二）に「西陣織屋中」の集団を組織し、その後の西陣の繁栄の基礎を築いていった、と述べる。豊田氏の先行研究を踏まえると、座が解体され、「町」という枠組みに統一されたことを、千本鉦と京鉦の序列が示している可能性がみえてこないであろうか。組み替えない従前よりの「町」と、解体された「座」の存在した地区を、千本鉦と京鉦とで表現している可能性はないであろうか。「町」という枠組みの形成期や完成期と、そのなかに暮らす町人の属性や、彼らの異動および移動実態を明らかにすること、すなわち、京都市中における祭礼の担い手の変化を丁寧に明らかにすることで、著者の歴史地理学研究はさらに意義を増すものと思われる。

終章のまとめにより、本書においてとくに重厚に論じられた今宮祭とその担い手の変化に注目すると、役人・神人らはもとより「一般の都市住民」が祭礼内容の担い手に加わっていったと考えられる一四世紀末～一五世紀初頭、そして、京都市街地の再開発がすみ、それ以前の鉦町の序列に変化がみられた一六世紀末期、その二つが、京都西陣における祭礼変化の画期であったと整理で

きよう。

また、近郊村落と京都市中との関係性を考察し、祭礼の空間構造をマクロに捉えた第七章と第八章において、京都市中の神社祭礼を論じられてきたそれまでの流れからすると、祭礼を通してみた京都市中と近郊村落との関係性を、今宮祭や御霊祭など京都市中の神社祭礼を事例に中近世を一貫して実証していただくと、中近世京都における祭礼の空間構造の推移が理解しやすくなる。御霊祭・今宮祭・六斎念仏を選択された理由と、その連関性を示していただきたかった。

評者は、本書によって、中近世における都市祭礼の内容とその担い手の変化は、人々の集住した「町」の形成期とその変化期を示す指標になり得るという手応えを強く持つことができた。本書によって多くを学ばせていただいたことに、心より感謝申し上げます。著者に励まされながら、評者も、祭礼内容とその担い手の変化を明らかにすることで、中近世の「町」の形成期や変化期を明らかにする歴史地理学研究を、今後も精一杯進めていきたい。

① 延宝六年（一六七八）刊の『奈良名所八重櫻』にみる春日若宮祭礼の渡物には、「一 白枝御幣、二十烈（馬乗乃伶人十人渡りぬ）、三日乃使、四 舞人、五 巫女、六 細男、七 申楽、八 馬頭の児、九 競馬、十 流鏑馬、十一 将馬、一馬四拾疋、十二 振鉦（是ハ春日乃たから物、野太刀、長刀等なり）」とあり、「振鉦」と称される太刀や長刀は供奉されるものの、剣鉦を見出せない。

② 「一宮頭役次第」、天文一四年（一五四五）。伊賀市編『伊賀市史 第四巻 古代中世』伊賀市、二〇〇八年復刻、七三三～七三五頁。

③ 三枝曉子『比叡山と室町幕府——寺社と武家の京都支配——』東京
大学出版会、二〇一一年、一三五頁。

④ 豊田武『座の研究 豊田武著作集第一卷』吉川弘文館、一九八二年、
四二三―四二四頁。

(A5判 二八一頁 二〇一三年一〇月)

吉川弘文館 税別一〇〇〇〇円)

(帝塚山大学文学部講師)